

# ピーマンの栽培管理

令和3年3月24日  
徳島県美馬農業支援センター

## I 圃場準備期から収穫初期の管理

### 1 圃場の選び方

- (1) 日当たりがよく、排水性・通気性に優れていること。
- (2) 連作とならないこと（前作にナス科植物を栽培していないこと）。
- (3) 枝が折れやすいので、風の強い場所は避ける。

### 2 土づくり

早めに土づくりに取り組む。堆肥等の土づくり資材は遅くとも定植1か月前までに全面施用する。

(土づくり例)

資材名	10a当たり投入量
堆肥	2,000kg
ナンチクペレット	450kg
苦土石灰	100kg
ハイグリーンゴールド	45kg

### 3 定植準備

- (1) 土壌改良資材及び基肥は全面施用する。
- (2) 排水性をよくするために高畦にする・排水溝を設ける。
- (3) 基肥の施用例

肥料名	10a当たり施用量	施用時期
有機入り特A805号	120kg	定植15日前までに施用
スーパーロング413(180日タイプ)	50kg	定植15日前までに施用

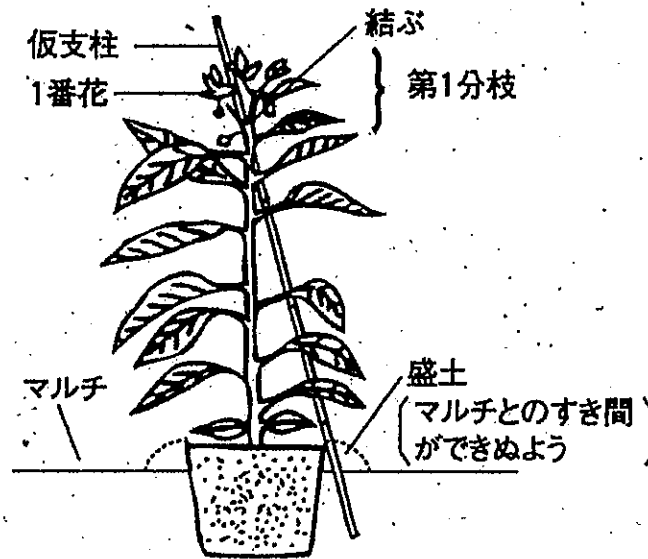
### (4) 苗の管理

- ①水のやり過ぎに注意する。
- ②灌水はなるべく午前中に行う。  
→ 夜間に水分が残ると、徒長の原因になるほか、べと病が発生しやすくなるため。

### 4 定植

- (1) 栽植密度の目安：畦幅160cm×株間60cm×1条植
- (2) 一番花の花芽が見えた頃～開花直前の苗を定植する。  
定植の遅れにより苗が成長し、根が鉢内に張り詰めている場合、鉢に接触している部分の根が衰えていることがある。この場合、定植後の苗の伸長が遅く、活着が遅れる傾向がある。
- (3) 地温は16℃以上必要なので、定植7～10日前にマルチを張り地温を上げる。
- (4) 2～3日晴天が続いた後で、朝の地温が18℃以上あり、晴天無風の日の午前中がベスト。

- (5) 深植えをしないように注意する。特に、胚軸が土に隠れないようにする。  
→ 疫病予防のため。
- (6) 定植時に根鉢を壊さないようにする。
- (7) アブラムシ類・アザミウマ類の対策
  - ① シルバーマルチを張る。
  - ② モベントフロアブル (500倍, 25~50ml/株, 育苗期後半) を灌注する。
- (8) 定植後の管理
  - ① 定植後は十分灌水し、活着するまでは乾燥しないように注意する。
  - ② 定植直後に仮支柱を立て、ぐらつかないようにする。



## 5 摘果・摘芽

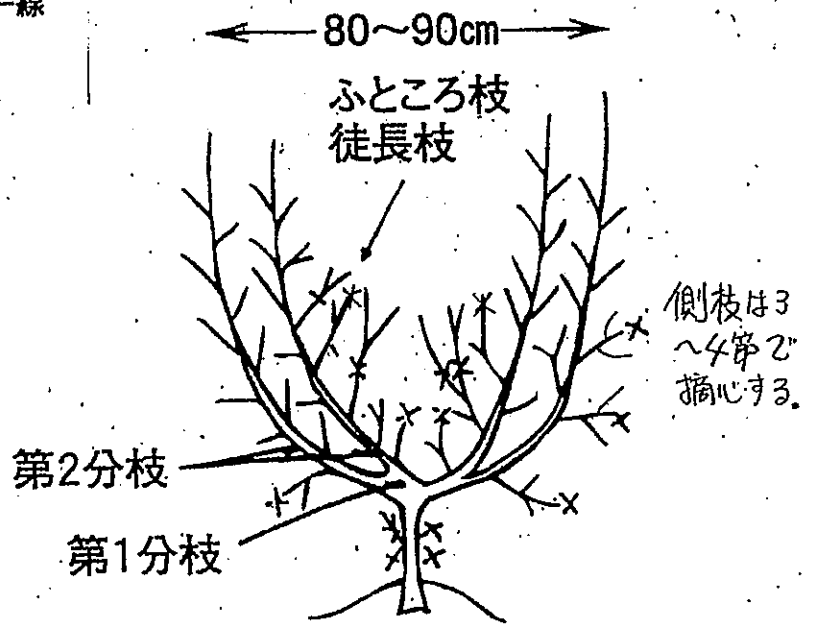
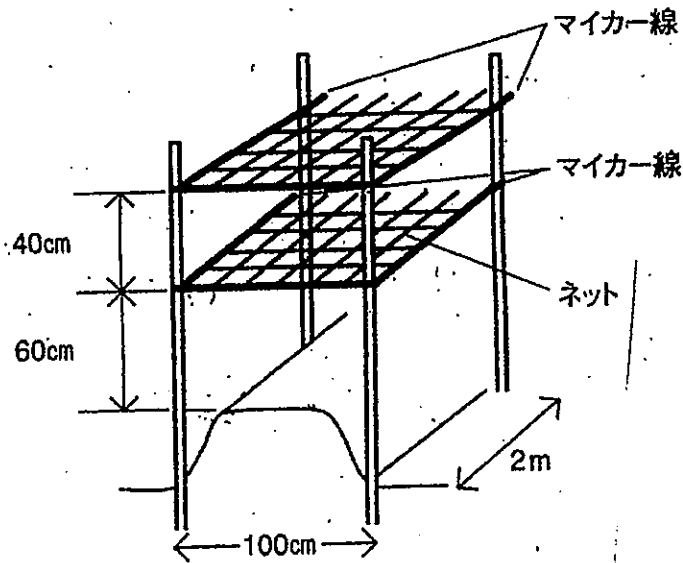
- (1) 生育途中においては第二花も摘花する。  
→ 株が十分にできていない状態で着果してしまうと、その後の生育が悪くなるため。活着が悪く生育が遅れた場合は、第三花も摘花する。
- (2) 活着したら第一分枝の下から発生するわき芽は摘み取る。  
→ 主枝の生育を促すため。
- (3) 不良果は早めに摘果する。

## 6 ネット誘引

- (1) 倒伏防止のため、早めにネットを張る。1段目のネットは、根元から60cmの高さに張る。さらに、成長に応じて1段目から40cmの高さに2段目のネットを張る。
- (2) ネットと同時に防虫テープも張る。
- (3) 伸長によりネットから外れた枝は、ネット内に戻すことにより、枝がなるべく垂直方向(上方向)を向くように誘引する。  
→ 枝が横方向を向くと草勢が抑えられ、果実の肥大が遅れるため。

## 7 整枝・剪定

- (1) 主枝は2本仕立てとし、3本目が出たら除去する。  
→ 果実が肥大しにくくなるため。
- (2) ふところ枝や徒長枝は適宜整理して、日光や風が株元まで当たるようにする。すり鉢状(盃の形)の草姿に仕立てるのが理想。  
→ 茎葉が繁茂すると株の内部が日照不足や風通し不良となり、落花、着色不良果、病害虫が発生しやすくなるため。
- (3) 整枝作業はなるべく晴天時に行う。
- (4) 整枝や摘果に用いるハサミは消毒を。  
→ モザイク病等のウイルス病が樹液の接触により伝染するのを防ぐため。



#### 整枝のポイント

- ・主枝の生長点より伸びた枝は芯を止め、果実を収穫した後に切り戻す。
- ・垂れた枝は早めに切り戻しを行う。
- ・混んでいるところを整枝し、株全体に日光が当たるようにする。
- ・側枝は3~4節で摘心し、その枝の収穫が終わったら1節まで切り戻す。

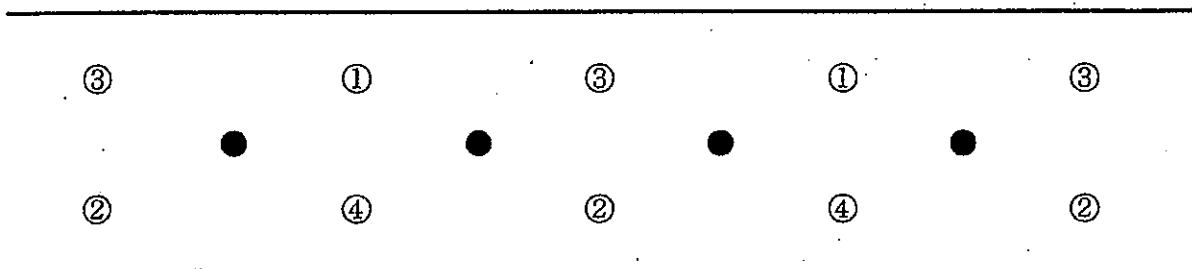
### 8 灌水

- (1) 乾燥に弱いので、灌水はこまめに行う。  
→ ピーマンはナスに比べて根が細く、根張りも狭く浅いため。
- (2) 灌水は午前中に行う。  
→ 萎れ、日焼け果、尻腐れ果は、いずれも乾燥・脱水が発生原因であるため。

### 9 追肥

- (1) 1回目の追肥は、2~3番果の収穫頃に有機入り肥料を施用する。
- (2) 2回目以降の追肥は、生育を見ながら15日ごとに、1回当たりの窒素成分で2~3kg/10aを施用する。長期多収を維持するためには、こまめな追肥が必要である。
- (3) 初回から3回目までは穴肥にする。

〈穴肥の施用位置〉



●...ピーマンの株 ①②③④...穴肥

#### (4) 追肥の施用例

肥料名	1回当たり施用量
NK808号(18-0-18)	10~15kg/10a
有機魚太郎(6-8-3)	15~20kg/10a

### 10 収穫

- (1) 着果数が多く、草勢が弱っていれば若採りする。
- (2) 収穫は午前中に行う。

### 11 生理障害対策

#### (1) 尻腐れ果

##### ①症状

- ・果頂部分が黒変し、壊死する。

##### ②原因

- ・カルシウム不足により発生する。
  - 高温、乾燥、カリの多肥、アンモニア態窒素の多肥等により、カルシウムを吸収できない
  - 果実の肥大にカルシウムの補給が間に合わない、等

##### ③対策

- ・有機物の施用と深耕により土づくりを行う。
- ・基肥の窒素施用量を少なくする。
- ・灌水により土壌の乾燥を防ぐ。
- ・敷きワラにより地温の上昇を抑える。
- ・石灰資材を適量施用する。

#### (2) 日焼け果

##### ①症状

- ・果実の表面が白く陥没する。

##### ②原因

- ・日射による果実の高温(50℃以上)と乾燥により、果実の水分が少なくなると発生しやすい。

##### ③対策

- ・遮光資材で日除けする。
- ・灌水により土壌の乾燥を防ぐ。

#### (3) 変形果

##### ①症状

- ・変形した果実や奇形の果実になる。

##### ②原因

- ・受精の異常により発生する。ピーマンの花粉は、10℃以下及び35℃以上では極端に発芽が悪くなるため、これらの温度帯で発生しやすい。

##### ③対策

- ・適宜、保温及び遮熱を行う。

## Ⅱ 梅雨時期の管理

### 1. 排水対策

梅雨入りまでに排水溝を設置する。

### 2. 病害対策

#### (1) 農薬による防除の基本

- ① 散布後3時間以内に乾くように
- ② 発症前の予防散布が重要
- ③ 登録内容の遵守

#### (2) 疫病 (病原:糸状菌)

##### ① 症状

- ・ 茎, 葉, 果実, 地際部から根など全身に感染する。
- ・ 最初, 暗緑色水浸状となり, やがて褐色となって腐敗する。

##### ② 原因

- ・ 高温多湿の条件で発生しやすい。

##### ③ 対策

- ・ 排水を良好にする。
- ・ 農薬例: ユニフォーム粒剤 (3g/株, 株元散布, 収穫前日まで, 3回以内)  
※使用量や使用方法を誤ると, 葉が黄化する等の薬害を生じる。  
※定植時から定植後3週間までの使用は避ける。

#### (3) 斑点細菌病 (病原:細菌)

##### ① 症状

- ・ 葉, 茎, 果実に発生する。
- ・ 葉裏に隆起した水浸状の小斑点を生じ, 次第に拡大融合して数mmの円形~不整形の病斑になる。病斑は, 周縁部が暗緑色で中心部が褐色となる。夏季高温時には, 病斑の中央部は淡褐色~白色になる。

##### ② 原因

- ・ 気温20~25℃で降雨の多い時期に被害が発生する。
- ・ 病原菌は土壌に残り, 風雨により飛散して伝染する。

##### ③ 対策

- ・ マルチにより土の撥ね上げを防止する。
- ・ 整枝後, 台風通過前後の予防散布
- ・ 農薬例: カスミンボルドー (1,000倍, 散布, 収穫前日まで, 5回以内)

#### (4) 軟腐病 (病原:細菌)

##### ① 症状

- ・ 果実と茎が被害を受ける。未熟果実に周辺部が水浸状で黄色から黄褐色の病変部を生じ, やがて果実は腐敗し, 異臭を放つ。被害果実は, 果梗(かこう)を残して脱落するが, 樹上に残ると白色の干からびた状態となる。
- ・ 流通過程において発症し, 腐敗することも多い。

##### ② 原因

- ・ 種子伝染, 土壌伝染する。
- ・ オオタバコガなどの害虫の食痕から感染することもある。
- ・ 高温多湿条件下での被害が顕著であり, 梅雨時期や豪雨後の発生が多い。

##### ③ 対策

- ・ 圃場の排水対策を行うとともに, 株間の風通しをよくする。
- ・ 降雨前後に薬剤を予防散布する。
- ・ 農薬例: スターナ水和剤 (2,000倍, 散布, 収穫前日まで, 3回以内)

## Ⅲ 梅雨明け以降の管理

### 1 敷きワラ

マルチの上に敷きワラをし、地温上昇及び乾燥を防止する。

### 2 灌水

高温期には畦間灌水を行う。1回に約3t/10aを目安に、徐々に流す（通路にしみ出す直前ぐらいの量とする。）。

### 3 虫害対策

(1) 多発後は農薬の防除効果が低くなるので、発生初期に叩くことが重要である。

(2) オオタバコガ

①病虫害防除所の発生予察情報に基づき、適期防除を行う。

②農薬例：プレオフロアブル（1,000倍、散布、収穫前日まで、2回以内）

### 4 裾葉の除去

晴天の日に、第1次分枝以下の葉を除去する。

## Ⅳ 台風・大雨時の管理

### 1 事前対策

(1) あらかじめ排水溝を設置しておく。

(2) 強風で倒れないよう支柱を補強する。特にネットの場合、1本が倒れると一気に倒れる場合があるので、十分な対策を。

### 2 事後措置

(1) 速やかな排水に努める。

(2) 被害果や折れ枝は、直ちに除去する。

(3) 病害が発生しやすくなるため、薬剤の予防散布を行う。

(4) 台風で傷んだ株の回復を早めるため、薄めの葉面散布を行う。